

頁 位置	誤	正
3 頁 式 (1.2.4a)	$RMS \left[\frac{d^4 y}{dt^5} \right] = \int_{-\infty}^{\infty} S_{\ddot{y}}(\omega) \omega^4 d\omega$	$RMS \left[\frac{d^4 y}{dt^4} \right] = \int_{-\infty}^{\infty} S_{\ddot{y}}(\omega) \omega^4 d\omega$
6 頁下から 4~5 行	A (Xa, Ya, 0)、B (Xb, Yb, 0)、 C (Xc, Yc, 0)	A (x _a , y _a , 0)、B (x _b , y _b , 0)、C (x _c , y _c , 0)
式(1.2.16) の分子第 2 項	$d_{ic}(t) = \frac{y_a(z_b(t)x_c - x_b z_c(t)) + y_b(z_c(t)x_a - x_c z_a(t)) + y_c(z_a(t)x_b - x_b z_b(t))}{y_a(x_c - x_b) + y_b(x_a - x_c) + y_c(x_b - x_a)}$	+ y _b (z _c (t)x _a - x _c z _a (t))
式(1.2.21)	$\varphi_{ijx}(t) = \frac{\theta_{ijx}(t) - \theta_{jix}(t)}{l_{ij}}$	$\phi_{ijx}(t) = \frac{\theta_{ix}(t) - \theta_{jx}(t)}{l_{ij}}$
式(1.2.22)	$\varphi_{ijy}(t) = \frac{\theta_{ijy}(t) - \theta_{jyy}(t)}{l_{ij}}$	$\phi_{ijy}(t) = \frac{\theta_{iy}(t) - \theta_{jy}(t)}{l_{ij}}$
8 頁 下 から 8 行、 11 行	時刻暦の RMS の比の平方根	時刻暦の RMS の比
9 頁 2 行	いずれか	いずれか
22 頁 1 行	基準化強度指標 (C _{G0}) 及び耐震診断指標の期待値 (C _{G0m} 、I _{sm} 、(C _{TU} S _D T) _m)	
23 頁 式 (2.2.4a)	C _T = Φ _i C _Y	C _{TU} = Φ _i C _Y
式(2.2.4b)	I _s = C _T S _D TF _u	I _s = C _{TU} S _D TF _u
25 頁 8 行	終局限界における累積強度指標 C _T は、	終局限界における累積強度指標 C _{TU} は、
25 頁 10 行	式 (2.2.11) 及び 式 (2.2.9) で F _u = 1, T = 1 とした関係式か ら、	式(2.2.11)及び式(2.2.9)で F _u = 1 とした関係 式から、

式(2.2.13)	$C_T = \Phi_i C_Y$	$C_{TU} = \Phi_i C_Y$
式(2.2.14)	$I_s [F_u = 1] = 0.6 C_{G0} = \Phi_i \frac{C_{G0max}}{F_{E0}} S_D T = \Phi_i C_Y S_D T = C_{TU} S_D T$	
25頁12行	従って、累積強度指標、形状指標、及び経年指標の積は、基準化強度指標 C_{G0} から計算できる。	
式(2.2.15)	$C_T S_D = 0.6 C_{G0}$	$C_T S_D T = 0.6 C_{G0}$
式(2.2.16)	$C_Y S_D T = \frac{0.6 C_{G0}}{\Phi_i} = 0.6 C_{G0} A_i$	
26頁下から2行	ii) 累積強度指標の期待値	ii) 累積強度指標、形状指標及び経年指標の積の期待値
27頁式(2.2.21)	$E[(C_{TU} S_D T)_{ik}] \equiv (C_{TU} S_D T)_{mik} =$ 以下修正なし	
式(2.2.22)	$E[(C_Y S_D T)_{ik}] \equiv (C_Y S_D T)_{mik} =$ 以下修正なし	
式(2.2.23)	$E[I_{sik}] \equiv I_{smik} = 0.6 F_u C_{G0mik} = (C_{TU} S_D T)_{mik} F_u =$ 以下修正なし	
30頁1行～2行	各層の質量 m_j	各階の質量 m_j
30頁5行	m_i 、 n は、第 i 層の質量、建物の総層数 (階数)	m_i 、 n は、第 i 階の質量、建物の総階数
32頁7行	加速度及、速度の	加速度及び、速度の
41頁12行	注目部分 i の標準的高さ	注目部分 i の階高
44頁1行	標準高さ	階高
71頁図4.2.2タイトル	図 4.2.2 加速度系上の質点とバネ	図 4.2.2 地盤上の座標系、質点及びバネ
71頁下から11行	地盤上の基準点 G	地盤上に設けた座標系の原点 G

71頁下から10行	G からの相対座標	G を原点とする座標
71頁下から9行	これを加速度系 G の座標	これを G を原点とする座標
71頁下から6行	基準点 G に関する	地盤上に設けた G を原点とする座標系に関する
71頁下から5行	基準点 G の	原点 G の
71頁式(4.2.1)	$m\ddot{u} = f$ 以下修正なし	
73頁式(4.2.5)	$m\ddot{x} = f_x - m\ddot{x}_g + m\omega_y^2 x - 2m\omega_y \dot{z} - m\dot{\omega}_y z$	
73頁下から8行	仮に、質点は周期 $T = 1\text{sec}$ 、変位振幅 $ x = 0.2\text{m}$ の正弦振動をしているとすれば、速度振幅は、	仮に、地盤の傾斜は正弦振動であるとするれば、角加速度振幅は、
73頁式(4.2.7)	$ \dot{x} = (2\pi/T) x = 1.26\text{m/sec}$	$\dot{\omega}_y = (10/180 \times \pi) \times 0.69 \approx 0.12\text{rad/sec}^2$
73頁下から5行	以上から、式(4.2.5)の第3項及び第4項の加速度振は、	以上から、式(4.2.5)の第3項以下の加速度は、
73頁式(4.2.7)	$\omega_y^2 x = 0.70^2 \times 0.2 = 0.1\text{m/sec}^2$ 、 $2\omega_y \dot{z} = 2 \times 0.69 \times 1.26 = 1.73\text{m/sec}^2$	$ \omega_y^2 x = 0.69^2 \times 10 \approx 4.8\text{m/sec}^2$ 、 $ \dot{\omega}_y z = 0.12 \times 10 \approx 1.2\text{m/sec}^2$
73頁下から3行	なお、鉛直方向の変位 z は小さいとして、第5項は無視した。	なお、鉛直方向の速度 \dot{z} は小さいとして、第4項は無視した。また、質点の座標をメートル単位で $(10, 0, 10)$ とした。
74頁2行	高層建物では、振動の振幅は 0.1m よりもかなり大きくなると想定されるので、	高層建物では、質点の高さは 10m よりもかなり大きくなると想定されるので、

(以上)